
鎮守の花弦(マッシュ × レイラ)

ミニヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮守の花弦（マシュー×レイラ）

【Nコード】

N1637B

【作者名】

ミニヤ

【あらすじ】

オスティアの、マシューとレイラの出会

美しく手入れされたオステイア城の中庭にて、
一人の女が涼しそうな木陰に腰を下ろした。

彼女の背後にある木の周りには、

丁度良い高さで整えられた植木がちらほらと花をつけている。
不意にその女が、手に持っている琴の弦を軽く指ではじいた。
ターン・・

女が何度かそれを繰り返すと、澄んだ単音が響いては消えた。
少し弦をいじってから彼女は満足そうに微笑むと、弦に指を合わせ
る。

女の髪は真っ直ぐで肩ぐらいの長さ、
そして目の覚めるような鮮やかな赤い色をしている。

切れ長の目に、髪と同色の赤い宝石の様な瞳。

細面で整った美しい顔に、

穏やかな微笑を浮かべながら琴を弾いている様子は見るものを引き
つける。

一言に琴と言っても、

彼女が手にしているものは別名ハープリュートと言われる楽器であ
る。

小型で簡単に持ち運ぶことの出来るギターとハープを組み合わせた
ような楽器で、

演奏者は胴から突き出た二本の棒をそれぞれ左右の手で握り、
両手の親指と人さし指で弦を弾く。

人間の自然な体の構えになつた姿勢で演奏できる楽器だ。

「あれ？」

しばらく奏でていた矢先、後ろから女のものと思われる元気な声が
した。

「レイラじゃなくって帰ってきてたんだ！」

高く、少し耳に響く声と共に、

16、7歳ぐらいの娘が幹の後ろからヒョイツと顔を覗かせていた。多少きつめな印象を受ける目つきだが可愛い顔、修道女の格好をしており、

ピンク色の長い髪をツインテールにしている。

「琴の音がしたから、もしやって思ったのよ。」

そう言っただけで娘はレイラと呼んだ女の前、柔らかな芝生の上に座った。「セーラ、久し振り。・・・どうしたの？あなたが話かけてくるなんて珍しいのね。」

娘とは反対に、静かに落ち着いた声がレイラから紡がれる。

「周りに人がいないんだからいいわよ。」

つんとした様子でセーラと呼ばれた少女が言う。

「あら、どうして？」

「だって、私の魅力が下がるのを気にしないでいいんだもの。」

「・・・相変わらずね・・・。」

レイラが苦笑し、軽くため息をつく。

もはや諦め・・・と言うよりセーラの言動に慣れているような印象を受けるのは、

彼女達の間でこの会話が幾度となく繰り返された事を物語っている。セーラは何故か、人前では自分に話しかけてこない。

本人曰く「レイラ」といっていると自分の魅力がかすんじゃうから」と言う理由らしい。

「それより！」

私、あなたの琴の腕は結構いいな〜と思ってるの。何か聴かせてよ。

「

ええ、いいわ。」

レイラが頷く。

「でも、もう少ししたらヘクトル様の所に行かなくてはいけないから、

長い間は無理なのけど・・・。」

「またなの？大変ね。」

「ふふつごめんなさい。」

困ったように笑うと彼女に優しい視線を投げかける。

「さっ一曲弾いてみるわね。」

短い茶色の髪と瞳、元気そうな青年がオスティア城内の廊下を歩いている。

開かれた窓からは日の光と涼しい風が気持ちよく入って来ていた。

「ようつマシユ。」

後ろから力強い声がして、マシユと呼ばれた青年が振り返った。

「あれ？若様じゃないですか。どうしたんです？」

若様と言われた青年は、オスティア城主ウーゼルの侯弟ヘクトルの事だ。

後ろに流している青い髪、青い瞳。そしてたくましい体つき。

たまに無鉄砲で乱暴なところもあるが、普段はさっぱりとしている。

「いや、これからちよつとな。」

声も心なしに弾んでいるように聞こえる。何だかいつにもまして機嫌が良さそうだ。

「何かいい事でもあつたんですか？」

「いや、これからあるだけだな。」

「はは、いいですね。それは・・・」軽く笑って、それは何の事なんですか？

とヘクトルに言葉を返し終わるか終わらない内に誰かが奏でているのだろう、

琴の音が中庭の方からかすかに聞こえてきた。

「！」

「こりゃ琴の音か。なあ、マシユ・・・」

と、ヘクトルが言いかけた途端マシユがもの凄い勢いで走り出した。

「あ、おいマシュー？」

「すみません若様つちよつと用事を思い出したんで！」

ちらつとヘクトルの方を振り返って言うと、

嬉しそうに顔をほころばせながらまた駆け出す。

琴の音が中庭の方から聞こえてくるので、マシューは一目散にそちらに向かった。

中庭に通じる廊下を出ると、少し離れた木陰に座っている赤い髪の女が見えた。

「レイラ！」

彼女の名を呼び、また駆け出す。琴の音が消え、彼女がこちらを向いたのが見えた。

「あゝマシューだ！」

耳につく高い声と共に、セーラも顔を覗かせた。

「何だ、セーラもいるのかよ・・・。」

ぼそつと呟き、ため息をつきつつ芝生の上に座り込む。

自分がレイラを見つけた場所からは、

セーラは丁度茂みの陰になっていて見えなかったのだ。

「どうしたの？マシュー。」

レイラが話しかけてくるのを聞きながら、彼女の側に座った。

「別につ帰ってたなら教えるよ。」

「でも、あなたならこの音で私の居場所ぐらいすぐ分かるじゃない？」

「そりゃ、そうだけど。何でここへ？」

「音合わせに来たの。部屋でやっても良かったのだけどいい天気だったし・・・」

でも、しばらくしたらヘクトル様の所に行かなくちゃね。」

「そっか。」

ちえつと心の中で舌打ちする。

「ねえ。」

セーラが口を挟む。

「レイラってマシユーにだけ何か冷たくない？」

「そう？普通だと思うけど。」

そんな風に見えるのかしらとレイラは心の中で首を傾げた。

「セーラ、若様が呼んでたぞ。お前何かへまやったんじゃねーか？」

「ま！失礼ね！！」

セーラは頬を軽く膨らませ、マシユーからつんと視線をそらす。

「もへクトル様ってば、一体何なのかしら？」

ぶつぶつと文句を言いながらも立ち上がると、

ばんぱんと服の土を払って行ってしまう。

だがレイラは、マシユーがほんの少しだけ含み笑いをしているのに気付いた。

「どうしたの？何だか嬉しそう。」

「べつつに」。それよりお前の、その琴だけど。」

「？これがどうしたの？」

マシユーが自分の持っている琴を、

興味深そうな顔つきで見つめているのに気付いた。

「あの時も、その音に引かれたんだな。ってさ。」

「あの時？」

「お前と初めて会った時。」

マシユーとレイラが初めて会ったのはこの場所だった。

密偵になってからしばらくして、

マシユーは初めての仕事を終えて帰って来た所だった。

ふいに中庭から綺麗な音が聞こえてきた。

（・・・？綺麗な音だ、誰だろ？）

首を傾げつつ中庭を覗く。

「あつ・・・」

思わず声が漏れた。

（綺麗な女だ・・・。）

顔が美しいのはもちろんの事、それに赤い髪が日に透け、かすかに風に揺れ、

まるで流れる火のようでとても綺麗だと思った。

「誰？」

凜とした、それでいて静かな声が聞こえた。その直後女が目を開き、こちらを向く。

「あつ・・・と、悪い、邪魔して。あんたの楽器の音が綺麗だったもんで・・・。」

「構いませんわ。」

にこつとその女が微笑む。

その笑顔を見て顔が熱くなる感じがした後、胸が高鳴る。

（そそそっだ！名前言うんだ！）

「お、俺はマシュー。ちよつとした・・・小間使い。」

密偵である事は、例え城の人間であろうとも言えない。

「そうですか・・・。私はこの城の楽師です。宜しく、マシューさん。」

「

楽師、と聞いてマシューは思い当たる事があった。恐らくウーゼル様の楽師だろう。

とても腕のいい楽師がおり、

彼によく呼ばれては演奏しているのだと噂には聞いていた。

自分は仕事の都合でお目にかかる事が出来なかったのだが。

「あんたの名前は？」

「レイラと申します。」

微笑みながら言われてまたしてもドキツとする。

「レイラ・・・。」

無意識の内に呟いて、思わずぼくと見つめてしまった。

「？何か？」

少し首を傾げてレイラが聞いてくる。

「あついや、その、俺の事はマシューでいいって。」

慌てて誤魔化す。

「分かりました。」

笑いながらそう言つて、レイラが再び琴に指をかける。

「では、マシュー。続けてよろしいでしょうか？」

「急にどうしたの？」

「思い出したんだよ。」

彼女に初めて会つてからと言うものの、

暇さえあれば琴を聞きに行ったり彼女に話しかけに行つたのだったか。

「でもびっくりしたぜ、楽師のお前が俺と同じ密偵だったなんてさ。」

「そう？」

自分たちの主であるオスティア公ウーゼルに、

まだお前と顔を合せていないはずの仲間がいるから、

と呼び出されたマシューの前に現れたのが楽師、レイラだったのだ。

「当たり前だろ。誰も宮廷楽師が腕利きの密偵だとは思わねー。」

「ばれるようじゃ密偵とは言わないでしょ。」

「まーな。なあ、聞いてもいいか？」

「何？」

「お前、何で楽器をやろうと思つた？」

琴を指差しながらマシューが言う。

「密偵の先輩に、何か芸を身につけておくようにと言われたの。」

それで楽器なら出来そうかな・・ってこれにしたの。」

「そっか。」

「でも、本当のきつかけは子供の頃だと思う。私が聞いたのも単調な音だったわ。」

「へえ？聞かせるよ。」

マシューが柔らかい草の上に寝転がり、こちらを向いて頼杖をつく。
「ええ。・・渡り鳥の季節だと聞いて、気まぐれで鳥が来る崖に行

ったの。」

彼女が一つ息を吐いて、どこか遠い目をする。

「最初は、風か・・鳥達の羽音だと思っただわ。」

途切れては続いて聞こえてきた・・。

「周りを見渡して・・気がつくとき少し離れた所に長い黒髪の、

金色の瞳をした綺麗な女の人が座っていたの。最初は高山の幻だと思っただけど。」

おぼろげに甦ってくる不思議な記憶。あの女の人は誰だろう？

もし、あれが夢だったのなら、何の意味があるのだろうか？

「その女の人は私に気づいていないみたいで、これと同じものを弾いて歌っていた。」

見とれてて・・ハッと気付いたら一人。帰ってからあの音と歌が忘れられなくて。

・・って言っても小さい頃の事だからいつの間にか忘れてたけどね。」

レイラは軽く弦を弾く。

「先輩に言われた時に、急にこの事を思い出したからこれを弾きますって言ったの。」

これを弾いてると、彼女去って行った方向を見ていられる気がするのよ。」

「ふん・・不思議な話だな。」

そう言うときマシューは少し身体を起こして手を伸ばし、レイラのすぐ側に立ててある琴の弦を軽く振動させる。

「どう？マシューもこれ、やってみる？」

「俺が？悪いけど、弾きかたなんか分からねーよ。」

「私が教えるわ。」

「おう！」

彼女がそう言った瞬間、マシューはガバッと身体を起こすと彼女の側に座る。

渡された琴を彼女が普段しているように立てる。

「こうか？」

「そう。ほら、その弦を弾いて・・・」

彼女がいつになく側にいる事を意識しつつ言われたとおりにする。

「次はそこを、2分の1の所を押さえるの。」

教えてくれる彼女の指が自分の指に触れて、心なしか顔が熱くなるのを感じていた。

「なあ、いい一体何の音が出るんだ？」

「共鳴音。」

彼女が答えた瞬間、マシューの指が弦を弾いてタン・・・と短い音が響いた。

「おついい感じ。」

「ふふ、マシューも何か楽器をやったら？芸があると便利よ。」

「俺が？」

「そう。」

「勘弁っ手先が器用だっただけで十分だろ？」

おどけて言うてから、彼女の顔を伺うようにして聞く。

「それよりお前、やっぱり今も真面目に剣の稽古とかしてんのか？」

「ええ。」

レイラが頷く。

彼女があらゆる面に対してかなりの努力家である事を、マシューはよく知っている。

そんな彼女を見ていて更に惹かれているのだから。けれど・・・

「それが、どうかした？」

「あんな、密偵なんてのは表立って戦うもんじゃねーだろ？」

自分たちの一番の目的は情報収集なのだから。

「戦いは他の誰かにまかせといてきっちり裏方の任務こなしてりやいって。」

「だから、そう上手くはいかないわ。」

マシューの言葉にレイラが苦笑する。

マシューと話していると絶対に一度はこの話題になる。

裏方の任務と言っても戦わずに済むような任務ばかりではない。ただ、普段は身分を偽装して、他の国での情報収集をするほかに、有力な密偵候補を見つけたりする事が多いだけだ。

「訓練で戦い方を教わったじゃない。・・実際、戦いがある。そうでしょう？」

密偵となるためには、男女の差なくそれなりに厳しい訓練がある。密偵の世界の専門用語や基礎知識。様々な密偵の種類や役割の違い。習得した戦闘技術の実地訓練・・自分も彼もそれに耐えてここまできた。

そうやって身につけた知識や技は単なる遊びの為では決して無い。既に幾つもの任務をこなしている本人がそれを知らないはずは無いのに・・

と、レイラは時々マシューの真意が分からなくなる。

「まあ・・な。」

それに対する彼の口調は重い。

「ご心配なく、それでも私は・・」

「ちげーって。お前は強い。それはウーゼル様だって認めてるし俺もそう思う。」

レイラは数多いオスティアの密偵の中でも1、2を争う実力者だ。

「だーくそっ俺が言いたいのはな。」

中々言いたい事が伝わらないもどかしさに、突然マシューは彼女の手を取る。

白くて細い・・綺麗な手だ。

「一応でも楽師のお前が、大事な手を汚すような事をすんじゃないって事だよ。」

まあ、お前より弱い俺が言ってもしょうがねーけど。」

「マシュー。」

思いがけない言葉に、レイラが驚いて目を開く。

「なあ、俺がお前より・・」

「ちよっと邪魔していいかしら？」

「うわっ!？」

突然声が聞こえ、マシューは慌ててレイラの手を放す。

「あなた達、実は仲いいのねえ・・・。」

聞こえた声はセーラのもだった。いつの間にか帰って来ていたらしい。

彼女がキツと目つきを鋭くした瞬間マシューとレイラは耳を押さえた。

「マシュー！ヘクトル様呼んでないって！

どうしてくれんのよ恥かしいやつたじゃない!!」

キーン・・・と甲高い声が辺りに響いた。

「悪い、聞き間違えた。」

やれやれと思いつつ一応謝る。

本当はレイラと二人きりになりたかったただけなのだから。

「ったくもう!どうやったら聞き違えるのよ!」

「だから悪かったって!な?」

セーラを半分拝むような格好をする。それで彼女はやっと機嫌を直したようだった。

「さあ、そろそろヘクトル様の所へ行かなくては。」

二人の輪に入らず冷静に琴をいじっていたレイラが立ち上がり、歩き出した。

「じゃあね、マシュー、セーラ。」

しばらくレイラの後姿を見ていたマシューがため息をついた後に口を開く。

「は。んじゃ、俺もどこかに行くかな。」

レイラも行っちゃったし、こんなうるさいのといつまでも二人でいる筋合いはないぜ

と心の中で呟いて立ち上がろうとして・・・思いつき後ろに引つ張られた。

「おい!？」

何とか倒れずに後ろを見ると、セーラが自分の服をつかんでいた。

「ねえマシユー。私、二人を見てて思ったんだけど。」

セーラがにやにやしながら話しかけてくる。

「何だよ。」

やっとの事で体勢を立て直す。

「あんたってばやっぱレイラの事好きなんですよ！」

「バ、ババカそんな事大声で言うな！！」

「な〜んか結構前から怪しいと思ってたのよね〜。でも、諦めた方がいいんじゃない？」

「は？」

「だって、レイラってヘクトル様のお気に入りだもの。」

セーラの顔に悪戯っぽい表情が浮かぶ。

「若様の？あいつはウーゼル様の楽師だぞ？」

「やっだマシユー知らないの〜？」

「何だよ。」

「ウーゼル様のお気に入りって言うのはもちろんだけど、

ヘクトル様ってばレイラが帰ってくると部屋によく呼んだり、一緒に出かけたりしてるの。」

一つの任務が終わって次の任務が来るまでの間、

誰かの護衛をするのはよくある話だ。

恐らく、次の仕事が来るまでにさり気なく護衛をするよう、ウーゼル様から言われているのだろう。

けれど・・・と、一抹の不安がマシユーの胸をよぎる。

先程の、ヘクトルのあの嬉しそうな様子は・・・？

「ヘクトル様、音楽鑑賞が趣味になったとか言ってるけど、実はレイラ目当てなんじゃないかしら？」

だってヘクトル様が音楽鑑賞だなんてちよつとね・・・。」

確かに若は音楽なんてのはかったるいと言っていたが、

彼はどちらかと言うと気が変わりやすい方だ。多分。

「気が変わったんじゃないの？」

「それがね〜ヘクトル様がいつか言ってたわ。レイラを自分の楽師

にしたいって。」

「おいおい嘘だろ？」

「えー？だったら本人に確かめてみなさいよっ

侍女達の間で結構噂になってるのよ？

まあ、マシューもよくどっか行ってるから知らないのは仕方無いけどね。」

妙に自信ありげなセーラ。

ちなみにマシューがよくどっか行ってるとはもちろん各国の偵察である。

「まさか・・・なあ？」

ボソツと呟く。

「あ、今ちよつと焦ったでしょ！？やっぱり本人に確かめるべきよ！今から行きましょっ！」

「おい離せ！」

ぐいぐいとセーラがマシューを引っ張って行く。

マシューは引っ張られながら、

自分の中で二人がそんな関係かもしれないなら知りたくないと思う
思いと、

真偽を確かめたいと言う気持ちがあふつかっているのが分かった。

しばらくして、二人はヘクトルの部屋の前に来た。

しかし、レイラの琴の音はしていないし

耳を澄ましても何の音も聞こえて来ない。

「しっつれゝしまゝす！ヘクトル様あ！ヘクトル様？」

ヘクトルの部屋のドアを何度か叩いてみたものの、応答は無い。

「おっかしゝわねえ。どこ行っちゃったのかしら。」

「セーラにマシュー。二人してどうしたのだ？」

後ろから低く静かな声が聞こえたので振り返る。

と、そこにはオズインと言う重騎士の格好をした男が立っていた。

「オズイン様！」

逆立っているこげ茶の髪と少々厳めしい顔つきのたくましい体つき

をした男で、

性格はとても真面目で堅物である。

その實力は、正に武でならすオスティア重騎士の名に相応しい。そして何より侯爵であるウーゼルより多大な信頼を得ている。

今はおそらく見回りをしていたのだろう。

「丁度良かったオズイン様、ヘクトル様どこに行ったか知りませんか？」

「どうした、ヘクトル様に何か用か？」

「ちよつと野暮用です！」

オズインは眉を顰めると、野暮用？と少し首を傾げた。

「確か、レイラを伴われて裏庭にある休憩所に行った筈だが。」

「有難うございま〜す！ホラ、行くわよマシュー！」

「へいへい。」

もはや成り行きに任せようと、諦めたようにセーラに引きずられるマシューであった。

その頃ヘクトルは裏庭の、

ぽつんとシンプルなテーブルと椅子が二組あるだけの、

小さい休憩所でレイラと雑談していた。

そこは草が小さい花を付けている以外、見るようなものはない。

「なあ。」

テーブルを挟んで反対側の椅子に座っているレイラを見ながら話しかける。

「はい？」

楽器に視線を移す。

「俺は、楽器の事は詳しく知らないがお前の琴の音は好きだぜ。」

「まあ、有難うございます。」

レイラは軽く頭を下げた。

「前からそうだったが、

お前がオスティアに帰って来てる間俺の側にいるのは兄上の命令か？」

ヘクトルは不思議そうに言うものの、まんざらでも無さそうな顔つきだ。レイラが頷く。

「はい。偵察から帰って来てからしばらくの間、次の仕事を指示するまでヘクトル様をお守りするよう、ウーゼル様に言われておりますので。」

彼女が任務でいない時は、別の人間が護衛につく。

「そうか・・・まあ、いいけどよ。」

せっかく帰って来たんだしゆっくりしたらどうだ？兄上に頼んでやるうか？」

「いいえ、平気ですわ。」

レイラがにこつと微笑む。

「ヘクトル様が大人しくして下されば、私もゆっくり出来ますので。」

「へいへい。」

レイラが澄ました顔で言うのを見て苦笑する。

「前の事・・・まだ怒ってんのか？」

「当然です。」

微笑んで言うのがまた恐い。

と思った時、レイラの目つきが一瞬鋭くなった・・・ように見えたが気のせいだろうか。

「どうした？」

「申し訳ありません、しばらくの間、席を外させて下さいませ。」

「そっか。なら早めに頼むぜ。」

「はい・・・。」

頷いて、レイラはその場から離れる。

「あゝゝ！いたわ！！」

掴んでいたマシユーの服を放してセーラが走り出す。

「おいっ待て！」

止めようとするものの、

それで彼女を止められる筈が無い事をマシユーは十分承知していた。

「へーくーとーるー、さま！」

軽く息を切らして、セーラはヘクトルの前で立ち止まった。
するとヘクトルはセーラを見て疲れたような表情になった。

「セーラに・・・マシユーじゃねーか。どうした？」

声にも少し張りが無い。マシユーもヘクトルの気持ちが分かった気がして・・・

いや、気持ちは同じだろうと思う。

「ちよつと、何ですかその顔は！？・・・って、あれ？レイラはいないんですか？」

セーラがきよるきよると辺りを見回す。椅子の上にあるレイラの琴だけが目に付いた。

「いや、少し前に外に出た所だ。会わなかったのか？
それより二人してどうしたんだ？」

「聞きたい事があるんです。ね！マシユー。」
パシッとマシユーの腕をセーラが軽く叩く。

「まゝな。」

本当はお前が聞きたいんだろうっ

と心の中で突っ込む。だがうんざりした様子を出しつつ
セーラを本気で止めようとする気持ちにならないのは、

やはり二人の関係を自分も知りたいと言う事だなと思い直した。

「何だ？」

「あゝ単刀直入に聞きますけど、ヘクトル様はレイラの事どう思
ってるんですか？」

「レイラ？何でだ？」

「ちよつと興味あるんです。ね？ね？教えて下さいよっ。

だってヘクトル様、前レイラを自分の楽師にしたいって言ってたじ

やないですか。」

「まあな。」

ああ、あのときの事か・・・と思い出す。

随分前に、セーラの前でついそんな事を口走った気がする。

だが正確には楽師ではなく護衛にすると云う事なのだが、

多くの者達と同じくセーラはレイラやマシユーが密偵である事を知らない。

それ以前に家族・・・は知ってるかもしれないが、

密偵である事を通常は恋人にも隠すのだと言う。

それからふと気付いたようにマシユーに尋ねる。

「そうだマシユー、お前から見てあいつはどうだ？」

「あ、そりゃそこらの女と比べると・・・ちよっつとはいいいかなって
思いますけど・・・。」

「だろ？美人だししっかりしててよく気がつくし、何より大人の女
って感じが・・・。」

「わ、若様はそう言いますけど」マシユーが慌てて口を挟む。

「あいつ実は口うるさいですし、歳の割に落ち着き過ぎだし・・・」

な、何より俺や若様より強いですし・・・。」

「そうよ！」

「「は？」」

二人同時に声を出して今まで黙っていたセーラの方を見つめる。
すると彼女は見るからに不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「何ですか二人してレイラレイラって！！レイラなんか年増じゃないっ
つ。

私と比べると若さや華やかさが足りないって言うか。」

「あのなあ・・・。」

マシユーがため息をつく。彼女はマシユーと同じ歳だ。

確かにセーラよりは年上になるのだが、そう離れてもいない。

「もつつ聞いてて呆れちゃったわ！私失礼しますから！」

彼女はくるつと踵を返すと足音も荒く行ってしまった。

「困ったもんだ、あいつの性格は・・・。」

頭をかきながらヘクトルがため息をつく。

まあ、機嫌が悪くなってもしばらく時間が経てばいつもけろっとしているから、

大丈夫だろう。

「おいマシュー、言うまでもねーけど。」

「分かってますよ。」

マシューが軽く笑いながら澄まして言う。

「セーラが他の女をあんな風に言うって事は、

その女を自分よりいい女だって認めてる証拠なんですよね。」

やはり考えている事は同じだったかと二人で笑う。

「ところで若様、レイラの事本気なんですか？」

セーラについての話題はそこで終わりにして、

マシューはずっと聞きたかった事を聞いてみる。

するとヘクトルは苦笑した。

「前はな。兄上に俺の専属護衛にして欲しいって言うてみたりもしたぜ。」

「え！本当に言ったんですか！？」

マシューの言葉に彼が頷く。

「ああ。けどやっぱり駄目だった。

それにあいつは俺の事をガキとしか見てねえしな。ま、そう言う事だ。」

その言葉を聞いて、

ほっと胸を撫で下ろし心の中でウーゼルに感謝するマシューであった。

「いつだったか、あいつと二人でいる時に押し倒そうとしたら張り倒されたぜ。」

「え！？」

彼の口から聞かされた爆弾発言に、マシューは思わず大声を上げる。

「じよ、冗談じゃないっすよー！！」

たとえ若様と言えどもレイラは渡しませんからね!」

珍しく焦った様子を見せるマシューを見て、

ヘクトルは一瞬驚いた顔をするがすぐににやりと笑う。

「へえ、初めて知った。お前がレイラをな・・・。」

ようやく一つ弱味を見つけたぜと考えながら言う。

「・・・ヘクトル様、ただ今戻りました。」

「え?」

ふいに、聞き覚えのある声がしてマシューはビクツと肩をすくめる。

「おっレイラ。」

ヘクトルが自分の背後を見て言ったのでゆっくり振り返ると、

そこには間違いなくレイラが立っていた。

「ヘクトル様、ウーゼル様に報告しなくてはならない事が出来ました。」

申し訳ありませんが失礼させて頂きます。」

いつもと変わらない口調と表情。さっきの話を聞いていた筈なのに、彼女は何も思っていないのだろうか。

「仕方ねえな。」

「はい。では・・・。」

レイラがヘクトルに向かって一礼して城の方へ歩いて行ってしまうのを見て、

マシューははつとして慌てて彼女の後を追いかける。

「レイラ! 待てよっ待てっ!」

彼女が足を止めて振り返ったのですぐに追い付く。

「何? ウーゼル様に報告しに行かないといけないのだけど・・・。」

「すぐ終わる! あのない、言っとくけど、さっきの話嘘じゃねーからな!」

自分で自分の顔が見えなくて良かった・・・とマシューは思う。

きっと今までなかった事が無いくらい顔が赤いのだろう。

もう聞かれてしまったのだからどうにでもなれと覚悟を決めた。ガシツと彼女の両肩を掴む。

「話？え、ええ・・・。」

突然肩を掴まれ、普段からは考えられないようなマシューの真剣な表情を見て、

レイラは動揺したようだった。

「今だから言うけどな、お前が他の男に取られるなんて許せないし認めねえ・・・」

ひ、一目ぼれ・・・だったんだぞ。」

マシューのその言葉を聞いて少し目を大きくしたレイラは、次にきよとした表情を浮かべる。

「何とか言えよ・・・。」

レイラは自分の両肩に置かれたマシューの手の力が一瞬強くなるのを感じたが、

その次の瞬間マシューは後ろを向いてしまった。耳まで赤い。

「偶然ね、私もよ。」

そう言っただけレイラは再び歩き始める。

「え？」

マシューは一瞬固まったが慌てて振り返ると、既に数歩先に進んでいた彼女の前に回りこむ。

「ほ、本当か！？だってお前そんな素振り何も・・・」

「さあ？」

レイラがとぼけたように言って、それからマシューに向かって優しく微笑む。

「またね、マシュー。急ぐから。」

レイラはそう言うと、今度は急ぎ足で行ってしまった。

彼女の後ろ姿を見つめながらマシューはその場ではあ・・・とため息をついた。

もう、彼女の後を追う事はしなかった。

「うん・・・」

妙に納得したように二人の様子を見つめる影一つ。

「あいつ、完全に尻に敷かれるな・・・。」

柱の影からさり気なく見ていたヘクトルがボソッと呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1637b/>

鎮守の花弦(マッシュ×レイラ)

2010年11月19日08時37分発行